

次につながる命を 撮り続ける

●写真家 中村征夫氏

繁茂するワカメ (1993 年)

私が初めて東京湾に潜ったのは1977年、汚染がひどかったころです。当時は「あんな海に江戸前の魚が本当にいるのか？ いるんなら食ってやろう」という冗談半分の気持ちでした。さらに港湾の潜水作業員から「おまえはいつもきれいな海ばかり潜っているから、こんなヘドロの海を撮るのは無理だろう」と言われたので、「よし！ じゃあ、やってみよう」という気持ちで始めました。

どうせ撮るなら、いちばん汚い場所に潜ろうと考えました。それが湾奥のお台場でした。海に入ると膝くらいの深さに、汚染に強い貝の仲間ムラサキイガイが密集していました。海面に顔をつけた瞬間、痺れを感じました。すぐに顔を上げました。「この水を飲んだら死ぬ」と思いました。

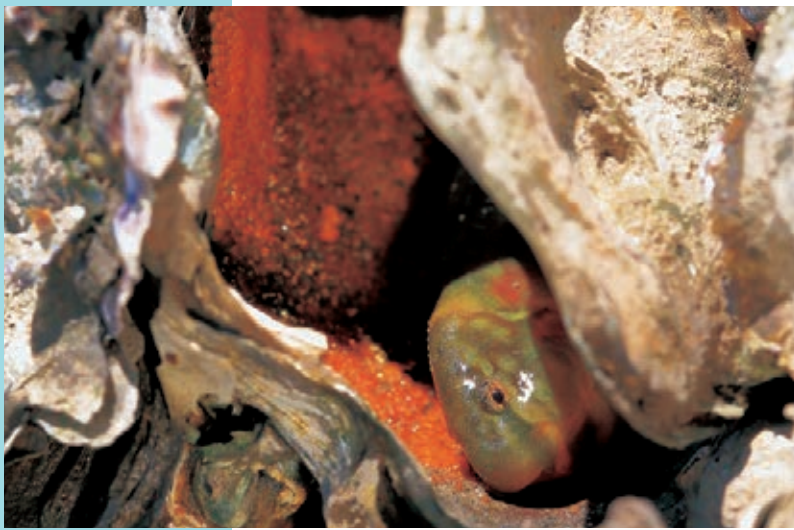
「これはダメだ、帰ろう」と諦めかけたとき、貝のまわりに何かうごめくものがチラッと見えました。「せっかくここまで来たのだから」と思い直し、意を決して体を沈めました。それは3、4センチほどの小さなイソガニでした。何匹もいて、しかも私に向かって飛びかかってくる。慌ててシャッターを切りました。そして海底のヘドロに手をついたら、近くに死んだばかりの1匹のハゼが横たわっていました。次の瞬間、私の手に何かが触れました。びっくりして手元を見たらアラムシロ貝でした。ハゼのお腹に何匹も集まってきて、死骸を食べ始めていたのです。まるでハイエナのような様子でした。

私はそれまでも世界中の海に潜ってきましたが、人間に立ち向かってきたり、死骸に群がる海中生物を見たことがありませんでした。東京湾は死の海ではなく、命がつながっている海だったのです。

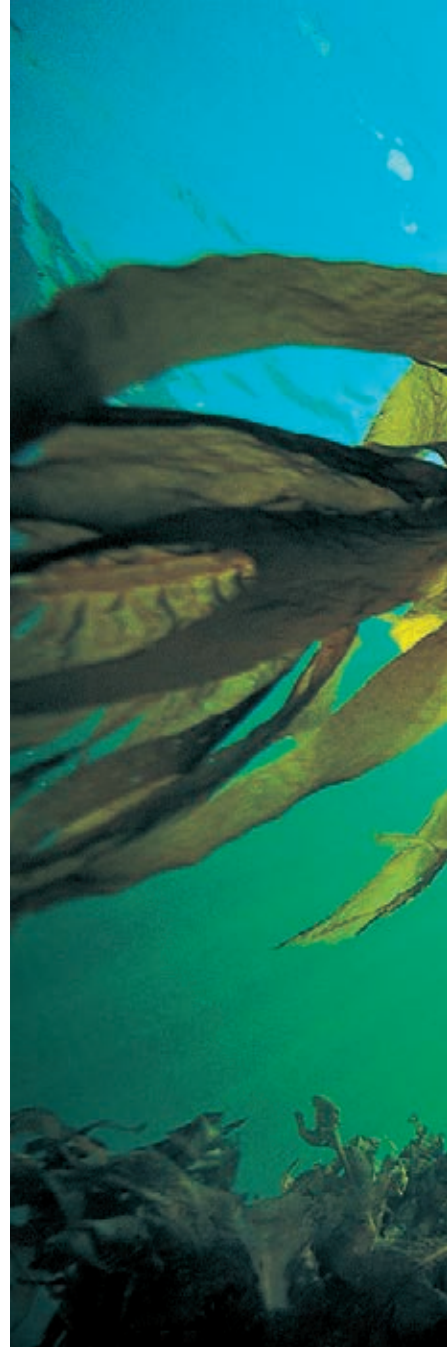
もっと驚いたのが、その翌日です。フィルムを現像したら、どのカニもびっしりとお腹に卵を抱えていました。小さな生き物たちが、汚染と闘い、たくましく生き抜いている。でも誰もこの実態を知らない。私は東京湾を知り尽くし



卵を守るためか、立ち向かってくるイソガニの母 (1977年)



カキの殻の中で卵を守るイダテンギンボ (2015年)



た漁師たちに取材しながら、10年間潜り続け、『全・東京湾』というノンフィクションを発表しました。

今や東京湾はずいぶんきれいになりました。けれど都会の海は埋立などによって干潟や浅場が減り、海に親しむ機会が少なくなりました。目に見えない海の中では磯焼けが日本各地で進み、さまざまな生き物を育む藻場が失われています。

写真家として何ができるのかと考えたとき、それは私たちと同じように、生まれ、成長し、やがて家庭を持ち、子育てをして死んでいく、そんな生き物たちが目の前の海にはたくさんいる、そのことを伝えることだと思っています。

夏、東京湾に潜ろうとしたとき、潮が引いた浅瀬にカキの殻がびっしりと付着していました。よく見ると殻の中に小さなイダテンギンボがいて、必死に卵を守っていました。日差しが強く、すっかり体も乾いているのですが、それでも懸命に潮が満ちるまで耐え、次につながる命を守ろうとしている。海にはこんなドラマがあふれています。(談)



中村 征夫(なかむら・いくお)

1945年秋田県潟上市生まれ。独学でダイビングと水中写真を学ぶ。76年フリーランスの写真家として独立。東京湾をライフワークに取材を重ね、現在も進行中。第13回木村伊兵衛写真賞、第26回土門拳賞、2007年日本写真協会年度賞などを受賞。主な著書・写真集に『全・東京湾』『海中顔面博覧会』(情報センター出版局)、『遙かなるグルクン』(日経ナショナルジオグラフィック社)など。